の分類で I または II 型であった.術後最長 3 ヶ月まで CEA 値の変動を追跡したところ,切除不能例は高値のままであったが,主腫瘍を切除不能例は高値のままであったが,主腫瘍を切除できたものでは術後陰性となった.

25. LPS の RIA 測定における問題点

田井 千秋 (岡山大・1外)

私共は1972年以来エンドトキシンの radioimmunoassay 法の確立を心掛けてきた。合成ペプタイドホルモンと異なり、未だ純品として抽出できていない上、構造と機能の結びつきも定かでないこのような物質の測定のため radioimmunoassayを応用する折、抗原抗体両面にわたる多様性が問題となることは当然である。また類縁物質との共通反応性、自然抗体による測定値の修飾など様々の難かしい問題が内包されている。こういった問題に対する今日までの私共の検討した結果を紹介しつつ、現在臨床検体(血清)のエンドトキシン測定に供している LPS RIA Kit (Type II) の信頼性と精度を中心に、従来の RIA 法や、Limulus Test と対比しつつその有効性や、長所、短所について論じた。

26. 硫安法,ポリエチレングリコール法,ミリポアフィルター法等による2本鎖ならびに1本鎖 DNA 抗体の測定

 更井
 哲夫
 宮脇
 昌二

 大藤
 真

(岡山大・3内)

自己免疫疾患、特に全身性エリテマトーデス (SLE) には急性期に特異的に高抗体価で,2本鎖 DNA (n-DNA) 抗体が検出され、臨床経過とも良 い相関を示していることから SLE 診断, 臨床経 過観察上極めて有用である. 一方 1 本鎖 DNA (d-DNA) 抗体は SLE 急性期のみならず, 寛解期に も高抗体価で検出され,他の疾患群にも低抗体価 ながら認められている。今回 n-DNA 抗体価は硫 安法, Solid-phase 法, を ³H・Actinomycin D 結 合 n-DNA を抗原として測定, また ¹⁴C-EColi DNA を抗原とした Millipore Filter Assay の 3 法 で測定し、 ³H・Actinomycin D・n-DNA を抗原と した硫安法が優れる結果を得た. また d-DNA 抗 体価測定は ⁸H・Actinomycin D・d-DNA を抗原と して硫安法, Solid-phase 法, 8.5% PEG 法 (第 24 回日本アレルギー学会に発表)の3法で比較し, 感度・特異性・再現性・定量的表現等により検討 したところ、PEG 法が α -gl 量等に左右され易い 問題はあるものの,優れた方法である結果を得た.